Osaka University Knowledge Archive

Title	近代日本における「雛祭り」の再生：国民行事への道程
Author(s)	ベレジコワ，タチアナ
Citation	間谷論集. 2019, 13, p. 49-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89858
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

〈研究論文〉

近代日本における「雛祭り」の再生
――国民行事への道程――

ベレジコワ　タチアナ

〈キーワード〉 雛祭り　雛人形　年中行事　西山哲治　高島平三郎

はじめに

三月三日、雛祭りの時、雛壇に人形や調度類を飾り、菱餅や白酒、桃の花などを供える。雛祭りは、女の子の健やかな成長を願い、家族全員が集う節句行事の一つである。また、幼稚園や学校などの教育施設、公共施設や役所においても雛祭りが行われることが多い。雛祭りは、個人的、そして国民的な事柄を持つ日本の国民行事であり、伝統文化の象徴として賞賛されている。ただし、明治時代以前には、雛祭りが、家族や隣人で祝う家庭内の行事でしかなく、当然のことだが、日本の伝統文化として説かれていなかった。また、子どもの健康を祈る行事ではあったけれども、現在のように子どもが主役となり、子どもの好みに合わせて飲食などが用意されることもなかった。

本稿は、雛祭りがいかにして個人的な行事から国民的な行事まで変わっていったのか、その過程を追っていくものである。具体的には、雛祭りや雛人形にとって転換期となった明治・大正期の言説を整理し、雛祭りが子どもを中心とした国民行事として再評価されていく過程を明らかにする。

ちなみに、本稿における国民的な行事、または国民行事とは、国全体が関心を持ち、ほとんどの国民が参加している行事、そして国家にとって重要な概念（例えば、国民教育や国家体制など）を表している行事を指す。とりわけ、明治以降、近代的な国家を目指した日本は、軍事力や経済力の他に、国家の統一という大きな課題も課せられた。明治時代以前、民間信仰と深い関わりを持ち家庭内の行事であった雛祭りは、明治以降になると、天皇中心の国家体制、近代的な家族

制、女性の理想像などを具現化した行事へ徐々に発展していく。その発展を本稿において注目したい。

先行研究に入る前に、本稿の構成を紹介したい。近代日本における雛祭りに関する先行研究を紹介した後、第１章において、雛祭りの起源と明治時代以前の特徴、そして第２章と第３章において、明治以降の雛祭りの役割の変遷、国民教育や国家体制との関わりなどを明らかにする。最後は、全体のまとめをした後に、本稿を閉じたいと思う。

まず、近代日本における雛祭りが先行研究においてどう論じられてきたのかを紹介しておこう。雛祭りや雛人形に関する先行研究は、多岐にわたり、数多くなされている。その中で、雛人形の美術的な価値や姿形の歴史的な変遷、地域差、著名な人形師の作品などに注目するものが大多数を占めている。また、雛祭りの起源をたどるものや、各時代の資料における雛祭りや雛人形に関する記述を収集し、分析するものもある。以下に、近代日本における雛祭りに注目した研究に範囲を限定して紹介したい。

皆川美恵子(2015) は、明治時代における雛祭りの廃止と復興について以下のように述べている。

> 五節供廃止は、人形屋を驚かせるものであり、経済的に大きな打撃を与えた。しかし、明治二十年頃から旧習打破の風潮も落ち着き、雛節供も復活していく。〔中略ー以下、引用文中の〔 〕内は筆者〕明治の近代日本は、やがて日清・日露戦争に勝利することになり、伝統的な国風文化が巻き返されて、雛の文化が盛んになる。この伝統文化復古の時期、江戸文化を偲び、記録をする同好会が、旧幕藩士や江戸町民たちにより種々、生まれている[1]。

つまり、雛祭りは明治になると一時的に衰退したが、1887年頃になると、日清・日露戦争の勝利の影響もあり、国風文化の復興とともに復活していくというのである。

さらに、宍戸忠男(1998) は、雛祭りの復興には、国風文化への関心だけではなく、明治天皇の雛愛好も関連しているという興味深い指摘を行なっている[2]。

また、神野由紀(2015) は、百貨店の商業戦略に注目している。三越が主催した新古雛人形陳列会を始め各種の宣伝行事は、一般消費者に雛人形の購入の必要性を意識させ、より過剰な消費を促したという。つまり、雛祭りの復興の背景には、国風文化への関心だけではなく、百貨店による商売戦略もあったのである。三越を始めとする百貨店は雛人形を必須の子ども用品として位置づけ、毎年のように新しい流行雛を提案したり、日本橋などの雛市より一足早く販売を始めたり、子どもを中心とした商品だけではなく、大人の趣味家やコレクター向けの雛人形を販売したりしていた。これによって、雛祭りは、近代風の消費文化と結びつけられ、その復興も促進されたという[3]。

そして、斎藤良輔(1975) は、明治期から昭和期にかけての雛祭りが登場する文学作品や雑誌の記事などを取り上げている[4]。ただ、斎藤の研究は、資料の紹介にとどまり、近代において雛祭りの役割がどう変わっていったのかを論じていない。

以上のように、これまでの先行研究では、近代日本における雛祭りが様々な観点から論じられてきた。旧習打破の風潮で一時的に廃れた雛祭りは、江戸文化への関心の高まりの影響で、そして明治天皇の雛愛好や百貨店の商売戦略の影響で、復興されたと先行研究の成果であるが、近代において雛祭りは、家庭行事から国民行事へ変わっていったという点には注目されていない。

ちなみに、本稿の引用は、読みやすさを考慮して必要な箇所以外はふりがな(ルビ) と記号を省き、二字以上の繰り返し記号に該当する箇所にはそれに相当する文字を当てたほか、漢字を通用するものに改めたことをあらかじめ断っておく。

1．江戸時代から明治時代へ

平安時代頃から貴族の間で「ひいなあそび」といい小さな人形を作って飯事遊びをする習慣があった。この習慣は、季節の変わり目に紙や植物で人形(ひとがた)を作り、身体を撫でて穢れを祓い、これを水に流すという行事と融合し、徐々に現在ではよく知られている雛祭りへ発展していった。

江戸時代に入ると、「雛祭り」という言葉が登場し、庶民の間で雛人形を飾り、

女の子の健やかな成長や無病息災を願う習慣が広がっていった。最初は数少ない人形が自由に飾られていたが、時間とともに人形の数と種類が増えていき、雛壇の段の数も、江戸中期には３段、江戸後期には７～８段まで増加していった。

飾られた雛人形の中には代々受け継がれていた古いものもあれば、新しく購入されたものや、親戚や友人から贈られたものもあった。また、豪華な人形を飾り、親戚や隣人に観察させ、自慢することは当時の大人たちにとって大きな楽しみであった。1658年には雛道具に金箔や蒔絵を用いて作ることが禁止され、1721年には雛人形が約24センチを越えてはならないと大きさが制限され、贅沢禁止、節約に連なる規制が出されることになったほど、豪華な雛人形や雛道具が広く普及したのである[5]。

ただ、平安時代頃の祓いの行事も、貴族の間の「ひいなあそび」も、江戸時代の雛祭りも、家庭と友人の輪にとどまり、多くの日本人が祝った節句行事の一つであったけれども、国民と国家にとって重要な行事としてはおそらく考えられていなかった。

また、江戸時代の雛祭りは、子どもの健康と成長を願う行事であったとしても、子どもが主役になり、飲食や遊びが全て子どもの好みやニーズに合わせて行われたとも言えない。むしろ、明治時代までは、雛祭りが大人の方が楽しんでいた行事であり、誕生日のように家庭内で祝う行事であった。後述するように、明治以降、雛祭りの批判と改良の必要性が絶えることなく提唱され、料理や人形などを子どもが好むもの、祭りを子どもが主役となるものに改める必要があるという記事が次々と掲載されるようになったこともそれを裏付けている。

明治維新後、西洋から入ってきた思想や技術の影響で、日本の昔ながらの習慣や行事が批判の的になった。特に民間信仰と深い関わりを持った五節句は、時代遅れの旧習とされ、廃止すべきものとして強く批判された。

さらに、1873年に新暦の実施に伴って、五節句廃止令が出された。代わりに神武天皇即位日など新しい祝日が定められた。雛祭りと端午の節句の廃止は、人形屋に大きな打撃を与え、毎年開かれていた雛人形や五月人形の市が大きく規模を縮小した[6]。また、五節句を祝う人も、時代遅れとして批判された。以下の新聞記事は、1876年３月に出版されたものであり、雛祭りに関する疑問や、旧暦

から新暦への変換に伴う混乱の様子を描写している。

> 田舎で旧暦を用ひる事ハ笑はれません花の都でさえ今月三日が節句だとて雛をかざり可成ばかばかしい気違ひだと思ッたら又来月の三日が本とうのお節句だとて雛を並べて売ッて居る見世も有りまた買ひに出かける者も有り何が何だか少しも新聞屋にハ分りません[7]。

この記事は、節句に人形を飾ることは、田舎ならわかるが、東京の人としてはおかしいという。さらに、旧暦から新暦への変換のせいで、人形をいつ飾ればいいのか、混乱している人がいて、二回も飾ってしまう人もいるということを新聞記者が報告している。ただ、一方、五節句廃止令の３年後に、雛祭りを祝った人がいたということもこの記事の内容からうかがえる。つまり、五節句廃止令が出されたものの、雛祭りなどの節句の行事が禁止された訳ではない。ただ、江戸時代と比べると、人形の売れ行きも、祝う人の数も大きく減少したことも事実である。明治初期の新聞において、各地の雛市の不況に関する記事が散見されていることもそれを裏付けている[8]。

先行研究において指摘されているように、しばらくすると雛祭りが復興する。1902年３月の『朝日新聞』において、その復興について以下のような記述が見られる。

> 御一新と共に、五節句ハ辞られたけれども、久しい習慣ハ容易に棄てられるものでないと見えて、いつの間にか復古して来た。〔中略〕何世紀もつづいて来た物といふハ、なかなか一編の理論位で、やめられる訳のものでない〔中略〕五節句などハ、寧ろ家庭の和楽を助け、風俗を柔らげ、人心をのどかならしむるもので、どうしてどうしてやめられ得るものでない[9]。

何世紀もの歴史を持つ五節句は、やはり容易になくなるものではないという。家庭行事の一つであった雛祭りは、家庭の雰囲気を温め、人の心をのどかにする。つまり、雛祭りの長い歴史と、のどかな雰囲気が、復興の理由の一つになっ

たとこの記事の内容からうかがえる。

ただ、雛祭りの復興には、上記の新聞の記事と先行研究で取り上げられている原因の他に、近代教育の影響も大きかったと考えられる。当時の教育学者は、雛祭りが国民教育に貢献できると説き、雛祭りの教育的な価値を提唱していた。これによって、雛祭りが子どもを中心とした国民行事への発展を遂げたと考えられる。以下は、近代教育と雛祭りの関係を論じていきたい。そのために、まず近代教育における人形の再評価を述べておくことにする。

2．近代教育と人形

欧米諸国において、人形の再評価は、遊戯の再評価から始まった。哲学者は18世紀の終わり頃から、「遊戯」という行為が人間や動物にとって非常に重要で、将来の発達において不可欠なものであると主張した。例えば、イギリスの哲学者ハーバート・スペンサー(1820～1903)は、遊戯が過剰な勢力によって発生し、大人の活動の模倣であると説いた[10]。そして、ドイツの哲学者カール・グロース(1861～1946)は、遊戯が模倣対象の有無と関係なく、必ず発生するもので、成長において不可欠な準備段階であると考えた[11]。さらに、オランダの歴史家ヨハン・ホイジンガ(1872～1945)は遊戯を、文化を生み出す根源、人類に生き甲斐を与えるものとして捉えていた[12]。子どもの遊戯の道具である人形は、こうした潮流の延長線上で再評価されたのだろう。

人形の教育的な価値を最も早く説いたのは、幼児教育の祖とされているドイツの教育学者フリードリヒ・フレーベル(1782～1852)であった。フレーベルは、人形遊びによって、子どもの人間性が発達し、子どもが思慮深く注意深い親や保育者として育つと説いた。さらに、幼い時の遊びを通じて男児と女児の精神的な相違、使命や生涯の相違が現れ、「少年は外的な自然を支配しそれに徹するという彼の使命を早くから予感し」、「少女は自然ならびに生命をはぐくむという彼女の使命を早くから予感」し始めるという。こうして人形遊びを好む女児に対して、男児は「子馬や竹馬」などの玩具を好む、とフレーベルは指摘した[13]。これは、いわゆる「女の子には人形、男の子にはおもちゃ」という論理の根源であろう。

19 世紀の終わり頃からアメリカ心理学者スタンレー・ホールは、子どもたちの人形遊びに心理学の立場から取り掛かった。人形は、教育において極めて重要なものであり、子どもの心と知識が人形遊びによって発達していると彼は主張した。ホールは、人形遊びの教育的効果を普及させるには、人形博物館の設立、人形の専門家による子どもたちの観察と調査の必要性を強く提唱している[14]。

日本においては、フレーベル教育論の影響も大きかったし、ホールの影響を直接受けた教育学者も多かった。後者の代表的な人物として高島平三郎(1865 ～ 1946) と西山哲治(1883 ～ 1939) を取り上げられる。高島平三郎は、1880 年代、アメリカで留学した時、ホールと出会い、ホールの研究に深く感心した。そして、帰国した後、ホールの調査方法を用い、子どもの人形遊びの研究に取り掛かった。彼は、人形が子どもの想像力や社会性、趣味、同情心などを育成し、将来的には良い親になるためには、重要な教材であると説いていた[15]。

さらに、西山哲治は、1906 年にアメリカで留学した後、ホールの *A Study of Dolls* を日本語に翻訳した。彼は、教育の実践家であり、東京・巣鴨私立帝国小学校及び附属幼稚園を 1918 年に創立した。西山は、日本初の人形病院を開き、1924 年以降、人形供養を始めたことで有名な人物であった。彼は、人形が子どもにとって大事な仲間であり、同情心、親切心、礼儀、社交性、友情、さらに想像力、注意力、家事、美育、趣味などを涵養させるもので、「善良なる家庭教師なり」、「女学校の校長よりも偉大なり」という[16]。

つまり、19 世紀の終わり頃から、子どもの教育において、人形が非常に重要なものとされ、女の子が将来心優しい母と妻に育てるには、不可欠なものであるとされていた。20 世紀初頭に、この考えは日本にも伝わり、日本における人形の再評価に大きな影響を与えた。当時は、人形が、情操教育に欠かせないものとして説かれていて、人形を飾る行事である雛祭りの再評価も人形の再評価の延長線上で起こったであろう。そして、時間が経つにつれて、情操教育と雛祭りの関係が次第に強くなっていった。以下は、近代教育における雛祭りの役割に関する言説を見ていこう。

3．近代国家と雛祭り

近代において、日本を訪れた外国人は、雛祭りを観察し、それを高く評価していた。1880年代以降、日本事情などを紹介する外国の書物には、雛祭りがよく登場する。西洋には見られない行事であった雛祭りは、外国人の関心を引き、日本特有の行事として紹介された。19世紀の終わり頃の紹介は、客観的に雛祭りの様子を紹介していたものであったが、20世紀に入ると、雛祭りは「日本特有の行事」だけではなく、日本は「子どもの楽園」である証、あるいは日本においては人形が特別なものである証としても説かれるようになった。

例えば、アメリカの人形収集家・研究家であったローラ・スタールは、1908年に日本における人形観と雛祭りについて以下のように述べている。

> Dolls are preserved and treasured and passed on from one generation to another, more perhaps than in any other country in the world. [...] The Japanese doll inheritance is a striking example of family life and so far as I have been able to discover one peculiar to that country. It is a beautiful idea and one which we might adopt with pleasure and profit. When a little Japanese maiden is born there is bought for her a small collection of dolls consisting of effigies of the Emperor, the Empress and five court musicians. [...] The same small child is never allowed to play with these except upon high days and holidays, the principal one being the annual feast of dolls of Hina Matsuri. This takes place on the third day of the month and is the great children's festival of the year; the girl's Christmas. [...] The morning of life is beautiful in any country and with one or two exceptions which need not be mentioned here, the life of the Japanese child is ideal.[17]

（〔日本において〕、人形は、どの国よりも大切に保存され、代々継承されている。〔中略〕日本人形の継承は、日本人の家庭生活を具現化した非常に印象的な一例であり、他の国には見られない特殊な習慣である。この発想は素晴らしく、我々もこれを受け入れたら、楽しいことも、得られることも大いにあるだろう。〔日本において〕女の子が生まれる時、その子のために小さな人形コレクションが購買される。人形は、天皇皇后と五人囃子を模したも

のであり、少女は、特別な祭日や祝日を除いて、これらの人形と遊ぶことは許されていない。雛祭りは、〔人形と遊べる機会として〕最も重要な日である。三月三日に行われる雛祭りは、子どもたちにとって重要な祭日で、女の子のクリスマスのような日である。〔中略〕わざわざ取り上げる必要がない１～２の例外を除いて、どの国においても少年期は、素敵な時期であるけれども、日本の子どもの生活は本当に理想的である[18]。)

日本人の人形観は特別であり、他の国には見られない。人形を代々継承し、女の子のために特別に人形を飾る雛祭りを催すことは、素晴らしい発想である。このような機会に恵まれた日本の子どもたちの生活は本当に理想的であると、スタールは主張している。

また、前出のスタンレー・ホールは、人形遊びに関する調査結果をまとめた *A Study of Dolls* という書物において、雛祭りにも触れている[19]。彼が取り上げた内容は、当時の日本に関する先行研究に基づいているものだったが、著名な児童心理学者が人形の教育的な価値を説きながら、日本の雛人形にも触れたというところが、日本人に強い衝撃を与えたのであろう。

以上のように、明治期に日本を訪れた外国人も、人形に関心を持った教育学者と人形収集家も必ずと言っていいほど、雛祭りと日本の人形に触れていた。その際、雛祭りは、子ども、特に女の子を中心とした行事として賞賛され、女の子のクリスマスとして説かれていた。ただ、前述のように、実際は江戸時代には雛祭りが主に大人が楽しむ行事であり、子どもを中心に行われたものではなかった。おそらく明治初期にもそうだったと推測できる。後述する雛祭りの改良に関する記事がそれを裏付けている。

しかし、外国人の評価の影響もあり、明治中期頃以降、雛祭りは子どもの行事として再生した。以下は、雛祭りがどのように子どもの行事として考え直されたのかを見てみよう。

３－１．子どもを中心とする行事

理科教育指導者、博物館学者として知られている棚橋源太郎(1869 ～ 1961)

は、生活改善運動に関わり、生活改善同盟会の会員であった。彼は、1923年にこれまで行われていた雛祭りの欠点について以下のように述べている。

> 是れ迄一般に行はれて来て居る雛祭りは、〔中略〕大体に於いて親達の楽み事になつて、子供そつち退けと云ふやうな弊がありはしないかと思ふのです。大供の娯楽になつて居る結果、往々非常な贅沢奢侈に流れ、非常な高価な雛を買ひ集めて、互に其贅沢を誇るとか、或は又客を招くにしても、親戚朋友を招いて、大供共が勝手な宴会等を催して、子供はそつち退けになつて居ると云ふやうな、色々な弊害があるやうに思ふ。故に是は何うしても何んとか改良をしなければならぬと思ふのでありますが、先づ以て雛祭りの意義を明かにして、一体其の目的を何処に置くかと云ふことから考へなければならぬと思ふのであります[20]。

棚橋は、これまで行われていた雛祭りは大人を中心としたものであり、大人が楽しむ行事であったという。その理由で、飾られた人形は、子どものためのものではなく、大人が自分の趣味に合わせて選んだものが多かった。結果として、雛人形は、豪華なものが多く、子どもが楽しむより、親戚や友達に自慢するためのものであった。このような雛祭りは、子どもに悪い影響を与えているので、改良しなければならないという。そのために、まず雛祭りの意義と目的を考えて直さなければならない。

具体的にいうと、棚橋が考えた目的とは、雛祭りの起源にある「伝説や、在来の習慣に拘泥しないで、今日の家庭、社会の状態、子供の本性と云ふやうなところから出発して〔中略〕在来の雛祭りに対して新しい意義を与へ」るべきといい[21]、雛祭りを子どもを中心とした行事に改めなければならないと主張した。

このように、20世紀に入ると、雛祭りは子どもを中心とした行事であるべきという考えが徐々に拡大していった。巌谷小波や前出の高島平三郎、そして西山哲治を始め、多くの日本の教育者が雛祭りの改良についての記述を残している。以下は、どのように雛祭りを子どものための行事に改良すべきかについての記述を取り上げてみよう。

まず、雛祭りの時に出される料理は、「召使ひ任せにせず夫人令嬢の自ら包丁を取り調理ありたけれ、従つて又客に対する給仕万端も自ら之れに当る様に」しなければならないという[22]。雛祭りは、母の思いやりを子どもに見せる機会である、親子の絆を深め、母と娘が交流する機会であるため、祭りの準備は、母親が担わなければならない。

さらに、飲食は、「子供本位にして、一切アルコール分を含まない甘酒であるとか、汁粉であるとか、近頃新しく出来たカルピスであるとか云つたやうな、無害で子供向の飲料を用ひる」[23]か、または、ココアや飴湯を用いるべきという[24]。

そして、人形は、「必ずしも内裏様や豆雛のやうな、子供の経験からかけ離れて居つて、一向子供の感興を催さないやうなもの」の代わりに、「現代式のお人形」、「調度道具の如きも平常女の子が弄んで居るままごと道具」を用い、「平常に子供が愛玩して居る人形のお祭をすることにすれば」、この祭りは、「女の子の娯楽デー」になるという[25]。つまり、全てのものは、子どもの好みやニーズを考えて用意しなければならない。

なぜ雛祭りは、子どもを主役とした行事に改良することがそれほど重要だったのか。近代には子どもが大人と異なった存在、大切にされるべき存在であるという考えが主流であったからである。子どもを大事にしている国は、近代的で、文明的な国として評価されていた。前出の高島は、国家の進歩にも影響を与える子ども観について以下のように述べている。

> 元来子供を大切にする国家は段段栄へて行き、子供を粗末にし子供に重きを置かぬ国家は段々衰へて行くといふことは、歴史が明かに証明して居ることであります。我国が今日のやうに段段盛になつて参りましたのは、少くとも東洋に於ては我国が一番子供を大切にし子供に注意するからであります。現に児童博覧会と云やうなものが成立て非常に盛んであつて子供に関する品物に斯る進歩を見るやうになつて来たのは論より証拠我国人が子供に重きを置くからであります[26]。

つまり、子どもを大切にすることは、国家を進歩させることに繋がるものだ、

というのである。高島は、日本が少なくとも東洋においては一番子どもを大切にしている国であるから、漸次盛んになっていくと説いている。

確かに、明治時代に日本を訪れ、日本において子どもが大事にされていることを賞賛している外国人が少なくなかった。日本は「子どもの国」や、「子どもの楽園」である、と外国人が絶えることなく称揚していた。「もつと西人の驚いて居るのは、日本の父母が小供を大切にすることで「日本は小供の楽園」といふ話は、殆ど、一般に承認せられて居ると言つてもよろしい」と日本の国文学者であった芳賀矢一が述べている[27]。

雛祭りも西洋のクリスマスに例えられ、子どもを中心とする行事、また日本において子どもが大事にされている証として外国人によって高く評価されていた。ただ、この評価と現実の差異に気づいた日本の教育学者は、雛祭りの改良の必要性、そして雛祭りを真の子ども行事にすることの必要性を提唱した。これ以降、雛祭りは、子どもを中心とした行事、「西洋のクリスマスのやうに〔中略〕皆で楽しみ祝ふ」[28]行事に徐々に変化していった。

子どもを中心とした雛祭りには、教育的な役割も見出された。以下は、雛祭りの際に、どのような教育を施すべきかについての当時の言説を見てみよう。

3－2．家庭教育と学校教育

女の子の教育における雛祭りの役割について、前出の棚橋源太郎とともに生活改善同盟会の会員であった画家の久保田米僊が以下のような記述を残している。

> 〔雛祭りは〕子女に家庭智識を与ふ、〔中略〕交際といふものを此間に教へ得る事あり、其小宴の間にはよろしき家にては琴三味線の賤しからざる曲をひきて相楽しむ習慣あり、家々の娘達招かれし婦人達も此事に迫まられて何時とはなしに音楽の趣味を覚へる〔中略〕衣服もかかる場所に相応したるものを飾りたくなりて、一年一度の雛祭りは日本の家庭を楽まさすと共に日本の婦女子に趣味教育を施す〔中略〕世にもめでたき美風なり[29]。

雛祭りは、家庭の仕事に関する知識を与え、女の子同士で交際する機会とな

り、また楽器の弾き方や衣装の着方を覚えさせ、女の子の趣味教育において非常に有用なものであるという。

また、前述の通り、雛祭りは情操教育の手段としても非常に効果的であると考えた人が多かった。ただ、雛祭りの効果は、家庭知識や趣味、情操教育にとどまらない。「〔内裏雛は〕朝廷のありさまを想像せられ。歴史の参考にもなりて優にやさしきものなり」[30]といい、雛人形とその飾りは、子どもに歴史を教える教育資料としても有効であるという。高島平三郎は、「雛祭と云ふことに依つて自分の家の歴史なり或は昔からの日本の国体、君臣の関係などと云ふことを説いて〔子どもに〕聞かせるには最も宜しい時である」という[31]。

さらに、雛祭りは教育施設においても行うべきだと説かれるようになるほど教育的な効果が注目された。特に、女学校において良妻賢母を養成させるには、雛祭りが有用であるとされていた。以下は、雛祭りの教育的な意義を取り上げた雑誌の記事である。

> 女学校は何れも良妻賢母を養成するといふ目的の下に建設されたるものなれば。雛祭の如きは最も適当なる儀式なるべし。〔中略〕此祭は決して遊戯にあらず深く女子教育の趣旨を寓したるものなれば。学校に於て之を行はば資益する所多かるべし。〔中略〕試みに雛祭に於ける教育の要義を挙れは(ママ)左の如し。
> 一、夫婦は人の大倫たるを知らしむる事
> 二、皇室尊崇の念を養成する事
> 三、優美なる古来の風俗を知得せしむる事
> 四、女子庖廚を掌るの本義を覚悟せしむる事
> 五、良妻賢母たるの要道を指示する事
> 六、家庭の趣味を了解せしむる事[32]。

良妻賢母を養成するには、雛祭りが最も適切な行事である。この行事は、単なる遊び、そして家庭内の行事というよりは、女学校で行うべき、女子教育に不可欠な要素を多く包含している重要な行事である。具体的には、雛祭りが女の子

に、夫婦の倫理と皇室尊崇を理解させ、古来の風俗を覚えさせる機会であるという。さらに、女性の本義である調理を体験させ、良妻賢母への道を指示し、家庭の趣味を理解させるきっかけとなる。

つまり、雛祭りは、家庭行事として女の子に家事や趣味、家と国の歴史を習う機会だけではなく、良妻賢母を養成させる機会でもあるという。

３－３．家族制と国家体制

前述のように、雛祭りは、「家庭の和楽を助け、風俗を柔らげ、人心をのどかならしむるもの」[33]とされた。雛祭りの時、「平素兄弟仲の悪いものでも整然と飾られた神聖なる古代の御真影の前では慎み畏れて平常兄弟喧嘩をしたことを悔い改めやうとの心を強める」という効果を西山哲治は期待していた[34]。

さらに、西山は、雛祭りと親子の愛情の関係について以下のように述べている。

> この雛祭は親子の愛情を深からしめるといふ事である。〔中略〕又、雛を飾るにしても母は子供の為に雛の陳列を指図し、陳列を手伝ひ、雛や雛の道具を買ひ求めてやるとか、飾るのに見苦しいのは繕つてやるといふやうな事は子女の最も喜ぶ所で、母の恩を憶はしむるに最も大なる仕向けと感謝するであらう。母を慕ひ、父を慕ひ、家族の人々を慕ふ愛家心を助長せしむる上に於て大なる助をなすものである。〔中略〕雛の礼儀にならつて貴賤上下の階級を守り、而も上下相和し、相助け、相楽しむ事を具体的に感知せしめ以て家族制度の道徳を養はうとするのは誠に有益にして有効なる教育上の年中行事である[35]。

雛祭りの時、母は人形を用意し、陳列に手伝い、壊れたものを直している。これに対して娘は自然に感謝の気持ちになり、母を慕うという。さらに、雛人形の飾りは、貴賤上下の階級を守り、お互いを助け合いながら、楽しみ合うことを象徴している。雛壇に飾られている人形と同じように上下関係で成り立っている家族は、人形に倣って、お互いに助け合い、家庭行事の時に一緒に楽しみ合うこと

を連想させている。

ただ、雛祭りは、親子、そして兄弟姉妹の関係をよくするだけではなく、夫婦のあるべき関係の見本も示している。倫理教育における雛人形の価値について以下のような記述がある。

> 雛は必らず夫婦一対ならざるべからず。其の一を欠きて陳列するを許さず。其の他五人囃等の如きは。或は欠くも妨けなし。是れ夫婦は国の大倫なるを明示するものなり。〔中略〕決して別々に置くを禁ずるは。夫婦の互に親愛すべきを表するなり。是れ家庭の教訓なりといふべし。〔中略〕雛には蛤を供するを例とす。蛤は両蓋ありて。もとより附著し居る蓋にあらざれば。決して合ふことなし。貞女両夫にまみえざるの義に同し。故に婚礼に之を用う[36]。

雛人形は、一夫一妻制と結婚の倫理の道徳教育を施すには良い機会であるという。内裏雛は、必ず一対で飾られ、一つが欠けることは許されていない。仲良く一対で飾られている内裏雛が愛し合っている夫婦に例えられ、雛人形の飾りは、家庭への教訓であると主張されている。

さらに、他の資料においても似たような内容の記述を確認できる。例えば、雛人形は、「一夫一婦の仲睦まじき家庭道徳の根本を具体的に」模範し、「夫婦間の貞操の道徳、家庭園満和合等の道徳上の教訓を実際的に示したものである」という[37]。

ただ、内裏雛は、仲のいい夫婦の象徴だけではなかった。内裏雛の飾りを眺める子どもたちは無意識に「天皇皇后両陛下を尊崇敬愛せしむる国体保守の根本基礎」[38]も覚えているという。天皇皇后を象徴する内裏雛の飾りは、天皇制に対する尊崇と敬愛を教える良い機会であるというのだ。

以上のように、雛壇に飾られている人形は、仲の良い夫婦、お互いを助け合う家族の象徴であると同時に、天皇皇后を頂点においた国家の象徴でもあると当時の教育者は提唱していた。雛人形の飾りによって表現されている近代的な家族制、そして近代的な国家体制は、子どもたちにとって家族のあるべき姿、そして

国のあるべき姿を覚えさせているので、雛祭りは、「国民教育の上より家庭教育の上より、実に理想的」[39]な行事であるとされていただろう。

おわりに

以上のように、江戸時代には家庭行事であった雛祭りは、近代教育の影響によって、徐々に国民と国家にとって重要な行事へ発展していった。最初は、雛祭りと情操教育、女の子の家事や趣味の育成における効果のみが説かれていたが、時間とともに良妻賢母や一夫一妻制と夫婦倫理、そして国家体制との関係性も説かれるようになった。このように、単に人形を飾って楽しむ行事である雛祭りは、国民教育の手段へ変わっていった。外国人は、雛祭りを全国的な行事、「女の子のクリスマス」、他の国には見られない子どもを中心とした行事として評価したから、このような変化が可能になったのだろう。外国人の評価と実情の差異を気づいた日本の教育者が、雛祭りの改良の必要性を提唱し、あるべき姿と必要な改良点を提案した。その結果、雛祭りは、新しい教育的な意義を与えられ、これによってその復興と普及も促進されただろうし、「国民行事」の事柄もこの時期に現れ、定着したのだろう。

ちなみに、近代日本において、他の節句にも教育的な効果が見出された。例えば、「七夕は人倫の根本たる夫婦相愛するの義から出たので女児の機織神を参(ママ)りて機杼紡績の女業発達を祈り男児の牽牛神を祭りて農耕殖産の男業盛栄を願ふ〔中略〕精神的教育」[40]とされ、さらに「和歌と習字との稽古をもし、婦人に最も美しい情操を養」う機会であるという[41]。

また、「九月九日の菊の節句の如きも、理想の花である菊に接して、心を養ふ、又は交情を温むる節句」として説かれていた[42]。

そして、端午の節句の教育的な役割については、西山哲治が以下のような指摘を行なっている。

> 五月人形は武勇、忠勇、豪勇の精神を養ふに足るのである。正成、道真、清麿、清正、鍾馗、金時、桃太郎の如き歴史上一流の人物を拉し来つてこれを凡て人形の形となし児童をして此に近かしめやうといふのである。斯くの如

き忠勇武烈の豪勇なる人間を作る用意としては従順、豪勇、忠実なる家来として犬、猿、雉、兎、馬の如きものをして献身的に努力せしめやうといふのである。〔中略〕斯くの如き忠勇なる人々の像を飾つて、此等の人物を崇拝し、此等の人物にあやからしめ、少しにても此等の人物に近づかしめやうといふ工夫を五月人形に現はしたものである。教育上から見ても誠に有益にして有効なる趣味深き男児の為の年中行事である[43]。

端午の節句の時、飾られている武者人形は、武勇、忠勇、豪勇の精神を男の子に植え付け、教育上から見ると有益なものである。楠木正成や坂田金時など有名な武士の姿を模した人形を眺める男の子たちは、自分でもこのような人になりたいと自然に思うようになる。さらに、様々な話において紹介されている忠実な家来は、献身的精神の象徴になっていると西山はいう。

以上のように、明治初期には、旧習として批判された五節句は、教育的な価値を見出され、国にとって重要な行事として復興された。その中で、雛祭りの役割と価値が最も多く説かれていて、当時の人にとって重要視されていたことをうかがえる。

注

1 皆川美恵子『雛の誕生－雛節供に込められた対の豊穣－』（春風社、2015年）256頁、260頁。

2 宍戸忠男「近世御所の雛と雛あそび」（『人形玩具研究－かたち・あそび－日本人形玩具学会会誌』第9号、日本人形玩具学会事務局、1998年）15-29頁。

3 神野由紀『百貨店で（趣味）を買う－大衆消費文化の近代－』（吉川弘文館、2015年）171-226頁。

4 斎藤良輔『ひな人形』（法政大学出版局、1975年）36-54頁。

5 明治時代以前の雛祭りや雛人形に関する情報は、本文中に取り上げた先行研究（斎藤良輔（1975）、皆川美恵子（2015））、そして斎藤良輔編『日本人形玩具辞典』（東京堂出版、1997年）を参考にしてまとめたものである。

6 当時の雛人形の売れ行きについて斎藤良輔は以下のように述べている。「明治維新の後

は三月・五月の節句飾りも急激に衰えた。五節句の廃止は専門業者にとってまったく死活問題であった」という（斎藤良輔『ひな人形』（法政大学出版局、1975年）36-37頁による）。

7 『読売新聞』1876年3月23日朝刊第2面。

8 例えば、「日本橋十軒店の雛市ハ昨年の上気景に引替へ今年ハ不景気」（『読売新聞』1880年3月3日朝刊第2面）、「府下御堂前の雛武者人形は近頃さつぱり売れぬやうになりし」（『大阪朝日新聞』1882年4月16日朝刊第2面）、また「雛人形の売高」という記事の中で、以下のような記述が見られる。「後維新前までハ十軒店の雛市にて年々十五六万乃至二十万両ほどづつの品が売たるも近年ハ年増に売高を減じ〔中略〕甚だ不気配なりしとぞ」（『読売新聞』1886年3月9日第2面）。

9 『朝日新聞』1902年3月6日朝刊第3面。

10 Spencer, H. *The Principles of Psychology*, London: Longman, Brown, Green and Longmans (1855).

11 Groos, K, Baldwin, E. L., trans. *The Play of Animals*, New York: Appleton (1898).

12 Huizinga, J. *Homo Ludens: a Study of the Play-Element in Culture*, London, Boston and Henley: Routledge & Kegan Paul (1949).

13 フレーベル著・荘司雅子訳『幼稚園教育学』（フレーベル全集）（第4巻、玉川大学出版部、1981年）145頁。

14 Hall, G. S., Ellis, A. C. *A Study of Dolls*, New York: E.L. Kellogg & Co. (1897) p. 53.

15 『朝日新聞』1910年11月21日朝刊第5面。

16 西山哲治『子供の憧るゝ人形の国』（大空社、1987年（1918年に南北社出版部より刊行されたものの復刻版））46-77頁、95-96頁。

17 Starr, L. B. *The Doll book*, New York: The Outing Publishing Company (1908) pp. 69-71.

18 日本語訳は筆者によるものである。

19 Hall., *op.cit.*, pp. 57-59.

20 棚橋源太郎「花咲く頃に人形祭り　雛祭り改善のこゝ」（『週刊朝日』第3巻第9号、朝日新聞社、1923年）10頁。

21 同前。

22 久保田米僊「雛と家庭と料理」（『月刊食道楽』第2巻第3号、有楽社、1906年）8-12頁。

23 前掲棚橋「花咲く頃に人形祭り　雛祭り改善のこゝ」、10頁。

24　前掲西山『子供の憧るゝ人形の国』、66-67 頁。

25　前掲棚橋「花咲く頃に人形祭り　雛祭り改善のこゑ」、10 頁。

26　高島平三郎「児童研究と玩具の製作」(『みつこしタイムス（臨時増刊）』第 7 巻第 8 号、三越呉服店、1909 年）72－94 頁。

27　青木存義訳『外人の見たる日本の児童』(興文館、1911 年）序より。

28　倉橋惣三「雛祭は我が国の美風」(『婦人界』第 2 巻第 3 号、東京社、1918 年）16-19 頁。

29　前掲久保田「雛と家庭と料理」、8-12 頁。

30　山下重民「雛祭の説」(『風俗画報』第 381 号、東陽堂、1908 年）1-4 頁。

31　高島平三郎「家庭教育より見たる雛祭」(『三越』第 1 巻第 1 号、三越、1911 年）70-81 頁。

32　重民「雛祭を女学校に行ふべし」(『風俗画報』第 443 号、東陽堂、1913 年）16-17 頁。

33　前掲『朝日新聞』1902 年 3 月 6 日。

34　前掲西山『子供の憧るゝ人形の国』、71 頁。

35　同前、68-71 頁。

36　前掲山下「雛祭の説」、1-4 頁。

37　前掲西山『子供の憧るゝ人形の国』、73 頁。

38　佐伯法雲「雛祭り人形天皇の御代とかや」(『正義の旗風』五明社、1905 年）32-36 頁。

39　三輪田真佐子「雛祭と家庭」(『弘道』第 276 号、日本弘道会、1915 年）36-38 頁。

40　前掲佐伯「雛祭り人形天皇の御代とかや」、32-36 頁。

41　棚橋絢子「雛祭と家庭の教育」(『弘道』第 276 号、日本弘道会、1915 年）33-35 頁。

42　同前、33-35 頁。

43　前掲西山『子供の憧るゝ人形の国』、79-81 頁。

ベレジコワ・タチアナ（大阪大学日本語日本文化教育センター　特任助教）

Restoration of Hina Matsuri in Modern Japan: Creation of an Event of National Significance

BEREZIKOVA Tatiana

After the Meiji Restoration (1868) many Japanese traditional festivals and events were criticized as obsolete. The five seasonal festivals (*Go Sekku*) were one of them. *Go Sekku* were abolished in 1873 due to adoption of the solar calendar. One of them, Hina Matsuri (or Doll's Festival, Girl's Day), celebrated each year on March 3rd, has also been subjected to a critique. Yet from the 1890s it had been gradually restored and became one of the most famous national events in Modern Japan. This paper discusses the development of Hina Matsuri from private family celebration, which it was in the Edo Period and the Early Meiji Period, to an event of national significance. In Modern Japan Hina Matsuri was celebrated not only among family members, but also in kindergartens, schools, public facilities and government offices. Also, the purpose of the celebration partly shifted from praying for girls' health to educational matters, such as instilling to young girls a good sense of fashion, ability to cook and decorate the room for the festivities, to entertain the gests. Moreover, from the Taisho Period Japanese educators and teachers started to describe the decoration of Hina Dolls (Dairi Bina) as a symbol of marital fidelity, monogamous marriage and even as a way to teach children about reverence for the Emperor and the country. New meanings of the traditional festival not only enhanced its restoration, but also made it one of the most important and well known national events.